

本校の卒業生である2名の教育実習生が、実習を終えて大学に戻った。ここに、音楽の実習生の「教育実習日誌」のコピーがある。野田中学校の先生方に毎週、配付している「職員室だより『切磋琢磨』」には載せたのだが、校長室だよりの読者の皆様にも、ぜひ紹介したいと考えた。日誌の日付は6月17日（木）である。実習最終日の前の日ということになる。コピーして、取っておきたくなる内容だった。

今日は4時間目に音楽の研究授業を行った。学級は2年2組で、前時で行った「夏の思い出」の曲の雰囲気をつかえる活動を踏まえ、表現を工夫するための活動を行った。

今回の授業では、前回とは異なり班で話し合う活動を入れることによって、自分の考えを他の生徒に伝えやすくし、また他の生徒の様々な考えを聞けるようにした。楽譜中に登場する2つの記号が曲に与える効果や、作曲者の意図について、また、それら2つを踏まえた表現方法の工夫について、私が予想しているよりもたくさんの考えが出たことに驚いた。

「水芭蕉の花が咲いている」の部分については、「花がゆっくり咲く」「静かな所で咲いている」「ゆらゆらと咲いている」「少しだけ咲いている」といった考えが出て、「はらかな尾瀬遠い空」の部分については、「暖かい心地良い風が吹いている」「遠くまで広がる尾瀬の広さが伝わるように」「前行ったことを思い出している」など、本当に様々な考えがあった。

このことで、その後の表現の工夫をスムーズに考えることができたのではないかと感じた。班から出た表現の工夫を実際に歌ったときも、それぞれの班の工夫をしっかりと意識して歌うことができおり、授業開始直後に歌ったときに比べて表現豊かで深みのある曲へと変化していた。

生徒の振り返りからも、「表現方法が多くて探究していくのが楽しい曲だと思った」「歌い方によってその曲全体のイメージが変わった」「作者が歌ってほしいかたちが記号になって表れていると思った」などといった感想が見られ、今回の活動から新たな気づきを得ていることが分かった。

授業を行った中で感じた反省点としては、生徒から出た表現をもう少し練習する時間をつくれればよかったという点である。生徒から出た意見を歌いながら確認すれば、時間も確保できて良かったのではないかと先生のご指摘を頂き、今後そうしていきたいと感じた。また、生徒の良い考えをひろいあげて共有するだけでなく、生徒本人に言わせることで他の生徒にも良い影響があったのではないかと感じた。

この実習生は、「校長室だよりNo.385」で紹介したとおり、1回目の研究授業では、発問がよくなり生徒が戸惑ってしまい、自分の思い通りには進めることができず、悔し涙を流していた。それが、2回目の研究授業では、驚くほど改善されていた。よくぞ、この短期間に、ここまで持ってきたものだと感心させられた。そして、3回目の研究授業の成果が、上記の内容である。2回目の研究授業から、さらに改善が図られていた。そのことを、生徒から出された考えと振り返りの記述が証明している。特に、振り返りは秀逸である。

2年2組の生徒に限らず、生徒は考えさせてもらえれば、その瑞々しい感性から、とてもいい考え、こちらが考えさせられるような、驚かされるような、はっとさせられるような考えを出してくれるものである。そのことを教育実習生が教えてくれた。

実習最終日となった6月18日（金）の朝には、先生方の前で挨拶をした。私は、すぐに実習生の控室に行き、「失礼します。先ほどの挨拶の評価をしにきました。85点です。内容は言うことはありません。あれは自分で考えるの？教頭先生は、「参りました」と言っていました。私は、『ん～やるなあ』とうなっていました。欲を言えば、声に張りがあれば言うことはありません。緊張したでしょ。それが声に出ていたでしょ。100点と言って、努力しなくなると困るからね」

嘘である。本当は110点である。15点分に大いなる期待を込めたのである。再び、教頭先生の言葉を紹介する。「末恐ろしい」